

きすき
木次線ストロール⑥

出雲横田駅

「社殿風の駅舎と

奇稲田姫の生誕の地」

2月22日木曜日、朝の9時過ぎに車で庄原の自宅を出た。営んでいる古本屋の2月休業で、定休日の月・火曜日以外にも取材ができるのはありがたいが、天候が悪い日が多く、その日も朝から小雨が降っている。

10時過ぎに八川駅に到着 10時21分発の木次行きに乗車。乗客

はわたしだけで、贅沢な貸し切り状態だが、さすがに行く末が心配になる。田園地帯を走る線路は踏切も多く、汽笛が頻繁に響いた。6分程で出雲横田駅に到着。トンネルが一つもなかった。

出雲横田駅の出雲神話にちなんだ愛称は「奇稲田姫」。八岐大蛇（またのおろち）の生贄になるとこ

ろを素戔嗚尊（すさのおのみこと）にたすけられて妻となる。古事記では「櫛名田比売（くしなだひめ）」、スサノオの智略で姫を櫛に变身させて難を逃れたという伝説がある。駅舎の外に出て右側に「稲田姫の像」が立っている。

駅舎は昭和9年（1934年）開業以来の姿を保っていて、屋根は入母屋造（いりもやづくり）、壁は校倉造（あぜくらづくり）。寺社の宝物や経典などを納める倉庫に見られる建築様式で、奥出雲町の重要文化財に指定されている。正面玄関には立派なしめ縄が

飾られていて、神社の拝殿のような佇まいだ。別棟のトイレや自転車置き場のデザインも古風で趣がある。

相対式ホーム2面、線路2線を持ち、列車の行き違いが可能な拠点駅の一つであり、木次・宍道（しんじ）方面への始発便も出ている。簡易委託駅で、委託された駅員が窓口業務を担っている。待合室には観光用のパンフレット、「出雲横田駅周辺」の地図を見ながら散策した。

古い町並みが残っていて、レトロな建物を見て歩くだけでも楽しい。旧横田町農業振興センター、旧山陰合同銀行横田支店の本町会館、横田相愛教会等々。斐伊（ひい）川の橋を渡って、「泡無酵母発祥之碑」の前に出た。

横田には、1712年からの蔵を構えた簸上（ひかみ）清酒という蔵元がある。明治43年に、町内の酒蔵を吸収合併し、当時この辺りが簸上三郡と言われたことから「簸上正宗」の称号となる。そして、「泡無酵母」発祥の蔵元として知られている。

日本酒製造に使われる従来の清酒酵母は「高泡形成」という特性がある。アルコール発酵の過程で発生した炭酸ガスの気泡に酵母が付着し、発酵が進むにつれてもろみがどんどん泡立って、かさ高になっていく。もろみがタンクから



駅舎の隣にある「稲田姫の像」



歴史ある古い町並みが残っている。



稲田神社の拝殿

は昭和13年（1938年）に九州小倉の石炭王・小林徳一郎翁が寄進。事業で大成功した翁が、故郷に貢献する社会事業として、拝殿、社殿、社務所を建立した。拝殿に参拝、ただただ能登半島地震の復興を祈願した。神社の敷地内にある「姫のそばゆかり庵」で昼食をとる予定が、1月4日から2月末まで冬期休業中。飲食店の集まる駅前まで戻る元気はなく、国道314号線に合流する道を急いだ。途中の「奥出雲たたらと刀剣館」を見学。入館

料は530円のところ、JAF割引で団体料金の410円。現代の刀匠の作品だけではなく、実際に使用されていた古刀も展示されていて、見比べることが出来る。砂鉄を精錬するときに出来る金屎（鉍滓）は見たことがあるが、精錬した玉鋼を見るのは初めて。銀色にキラキラ輝いている。国内で唯一たたら製鉄を行っている「日刀保たたら」が奥出雲町大呂にある。そのたたら製鉄の地下施設の実物大断面模型が展示してあり、複雑で精巧な仕組みを間近で見ることが出来る。この刀剣館と雲州そろばん伝統産業会館は月曜日が定休日。いつものように月曜日に出かけていたら、入館することはできなかった。国道314号線に出て、八川駅を目指して歩いた。霧雨が降り続いて、風が凍てつくように寒い。腰痛からくる足の痺れが悪化、「原口別れ」のバス停からコミュニティバスに乗った。芸備線ストロールを開始して以来、バス利用は初めてである。大型のワゴン車で乗客はわたし一人、料金は一律200円。自分の車のある八川駅まで5分もかからない。今後はこうした省エネタイプの小型バスが、地方の主力になるのだと思う。徒歩によるローカル線の「完走」が途切れて残念だが、これもまた新たな経験である。駅前にある「八川そば」で遅い昼食。先月号の取材のお礼を言って、冊子を手渡した。

あふれ出たりと、泡の管理が大変になる。

そこで登場するのが泡無酵母。昭和37年に、簸上清酒で泡のたたない清酒酵母が発見され、それが改良されて全国に広まった。現在は泡無酵母を使った酒造が主流になっている。こうした歴史に遭遇できるのも、町歩きの魅力だろう。

観光パンフレットに記載されている「雲州そろばん伝統産業会館」を見学。出雲横田駅の隣にある。入館料は310円だが、JAFの会員割引で団体料金の260円。小学生の団体の先客がいて、退出するのを待ってから見学した。

雲州そろばんの歴史や製造過程を紹介するビデオが放映されていて、その職人技に魅了された。雲州そろばんが画的だったのは、その堅牢さによる耐久性。堅い木材の加工を可能にしたのが職人の創意工夫とたたら製鉄の地ならではの手作りの鉄製の道具類。手作業で磨き上げられた雲州そろばんは、工芸品であり美術品だ。

数々の名品に混じって、芸州（広島）そろばんも展示されている。解説文によると、雲州の大工、村上吉五郎が、芸州の名工、塩屋小八のそろばんに感心してそろばんを試作したのが雲州そろばんの始まりだと言われている。

る。芸州そろばんは江戸時代の広島藩の特産品だったようだが、現在は伝承されていない。

稲田神社を目指して歩いた。町並みを出て、田園地帯の中を歩くとあちこちにこんもりとした丘がある。この周辺は、大規模な鉄穴（かんな）流しが行われた地域で、山を切り崩して水流に流し、比重を利用して砂鉄を採取。その残土が鉄穴残丘であり、大量の水を流した跡地が今は美しい棚田になっている。

寄り道しながら30分ほどで稲田神社に到着。創立年代や由緒は不明のことだが、奇稲田姫の生誕の地に建てられた古社である。現在の社殿

は昭和13年（1938年）に九州小倉の石炭王・小林徳一郎翁が寄進。事業で大成功した翁が、故郷に貢献する社会事業として、拝殿、社殿、社務所を建立した。拝殿に参拝、ただただ能登半島地震の復興を祈願した。神社の敷地内にある「姫のそばゆかり庵」で昼食をとる予定が、1月4日から2月末まで冬期休業中。飲食店の集まる駅前まで戻る元気はなく、国道314号線に合流する道を急いだ。途中の「奥出雲たたらと刀剣館」を見学。入館料は530円のところ、JAF割引で団体料金の410円。現代の刀匠の作品だけではなく、実際に使用されていた古刀も展示されていて、見比べることが出来る。砂鉄を精錬するときに出来る金屎（鉍滓）は見たことがあるが、精錬した玉鋼を見るのは初めて。銀色にキラキラ輝いている。国内で唯一たたら製鉄を行っている「日刀保たたら」が奥出雲町大呂にある。そのたたら製鉄の地下施設の実物大断面模型が展示してあり、複雑で精巧な仕組みを間近で見ることが出来る。この刀剣館と雲州そろばん伝統産業会館は月曜日が定休日。いつものように月曜日に出かけていたら、入館することはできなかった。国道314号線に出て、八川駅を

特別連載③〇

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第二部 歴史事項を見る

三月三日 桜田門外の変 万延元

(一八六〇)年

水戸藩・薩摩藩の尊攘派浪士によって起こされた井伊直弼の暗殺事件。



開国の調印、安政の大獄などの政策が原因。安政五年問題で、水戸藩内はまとまりを欠いていた。日が経つにつれて、水戸藩上層部の意見は幕府側へ傾いていた。だが、若手の連中はそうではなかった。攘夷を迫る朝廷は正しく、開国してしまった幕府は間違っている。就中、勅書の返還を迫る井伊大老は悪の元凶であると思いこんでいる。ついに彼らは脱藩して井伊大老暗殺の決意を固める。

暗殺の予定は二月二十八日だったのだが、水戸からバラバラに脱出したため、数がそろわないのは三月一日だった。一日、二日と会合して、三日襲撃の手はずを決める。三月三日は珍しく前夜からの雪だった。この雪が襲撃側に幸いした。まさか登城行列へ斬り込むとは予想していなかった。供の侍たちは、雪で刀が濡れるのを嫌って防水用の革袋をかけており、斬り込まれたときすぐに刀が抜けなかった。森五六郎が先頭に斬り入り、稲田重蔵が駕籠に突きを入れ、薩摩

の有村次左衛門が大老の首級を挙げた。わずか十八人の襲撃によって、日本の権力を一手に掌握していた男が首をとられたのである。これによって天下の大勢は一変した。日本暗殺史上、これほど効果的な暗殺はない。(画像は「桜田門外の変」を題材にして描いた月岡芳年の浮世絵「江水散花雪」の一部)

三月八日 京都宝永大火 宝永五

(一七〇八)年

油小路姉小路下町町の銭屋市兵衛方から出火、西南の風にあおられて東北に広がり、前代未聞の大火となった。町数四百十五、家数一万百三十軒余、神社六十八が焼けた。禁裏御所をはじめ、新築間もない東宮御所など公家屋敷七十八、大名屋敷二十四も類焼した。

三月二十四日 壇ノ浦の戦 文治元(一一八五)年

長門国壇ノ浦で行われた源平最後の合戦で海戦であった。平氏の五百余艘に対して、源氏は八百余艘で戦った。戦場となったのは流れの早い関門海峡で、朝の六時頃から始まった。午後になり潮の流れが逆になり、平家は不利となり、戦死するものも多くなり、平知盛が安徳天皇の御座船に最後のときがきたことを伝えた。清盛

の妻二位尼は、まだ八歳の天皇に「海の下にも都がありますよ」と、慰め、自分は宝剣を抱いて海中に没した。天皇は按察局に抱かれて入水し、局は海上に浮いて助けられたが、天皇は没したままだった。一門次々に入水し、宗盛・時忠など助けられたものもいたが、ここに平家は滅亡した。

三月二十四日 善光寺地震 弘化四(一八四七)年

この年、浅間山の噴煙が異常に少なくなったので怪しんでいたところ、この日の夜に信州で大地震、翌二十五日の朝まで、八十数回も震動があった。方々から火事が出て、圧死するもの、焼死するもの数知れず、松本の城や松代の城、各城下町、村々みな被害があった。ちょうどこの年は善光寺の開帳にぶつかっていたので、参詣の人はみな災難をこうむった。

地震は四月になっても五月に入ってもやまず、山が崩れたり川が溢れたり、被害は大きくなるばかりだった。なかでも恐ろしいのは、大地が裂けてその裂け目に人家が落ち込むこと。どの川も溢れて洪水となり湖ができる。死亡した人馬の数ははつきりしないが、三万人ほどではなかったかとされている。

文学探訪

人生探訪の徒、倉田百三の流転①

3分の2は病臥での著作だった

音谷健郎

倉田百三の畢生（ひつせい）の名作『出家とその弟子』は、その悩み多き青春の集大成だったと、私は断言できます。これに続く名作『俊寛』

や『歌わぬ人』『父の心配』などは、その後の波乱を含んだ人生の映し鏡のように思います。

倉田百三の人生を振り返ると、作家としての魅力と同時



百三と晴子さん。大正7年ころ、九州・福岡で療養の時の写真

に、病苦を抱えてみじんもへこたれなかったその生き方に強く惹かれます。昨年（23年）この情報誌「県北どらくろあ」に連載した「青春の百三」だけでは物足りなくなると、壮年・晩年の人生をこそ振り返らなくては、思うようになりませんでした。

一高を退学して、帰郷します。一高の2年目から熱烈な恋愛関係になった逸見久子との失恋も重なり失意のどん底でした。神戸の須磨や広島福山の福山・鞆で療養をして平穏を取り戻し、庄原に帰郷し上野池湖畔の一軒家に半年間独居し、読書や書簡交換に没頭します。この時の思索は『愛と認識との出発』に結実していると思います。この年（大正3年）9月になると、痔ろうを併発して広島福山の病院に入院します。ここで、キリスト教アライアンス教会から派遣された看護婦、高山晴子（通称お絹さん）と運命的な出会いをするのです。だが、痔ろうの3度の手術も効果なく衰弱し、九州・別府へ転地療養します。

大正5年、倉田家の4女政子の重態の知らせで帰郷、相次ぐ家族の不幸に立ち会います。この庄原帰郷の最中に、実家で書き始めたのが戯曲『出家とその弟子』でした。どんな心境だったのでしょうか。自身の病状もあり、暖かいところでの療養をと広島市の郊外、丹那に移り、大正5（1916）年に書き上げます。これは出版にこぎ着けると同時に、みるみるベストセラーになったのです。大正6年、百三26歳の時です。

百三はこの間に晴子との間に長男地三をもうけ、関節炎、骨盤カリエスなど併発し、常臥の身だったので、これに続いて、病臥のまま翌々大正8年に『俊寛』を、続いて『歌わぬ人』『父の心配』と矢継ぎ早に出しています。3作品とも戯曲です。『俊寛』（三幕）は平安末期、平清盛に弓を引こうとして発覚、薩摩（鹿児島）の南の孤島に流罪となり、そこで果てた高僧俊寛を主人公にしています。孤独に耐えかねての鬼気迫る描写が、これでもか、これでもかと続きます。「妻や子が生きているのだと思えばわしは死ねなかった。しかもきつと不幸と恥辱とのなかで」「わしのごとく遇せられて死んだものの霊が、怨霊にならずしてなんになるのだ」と。自身の不幸の真っ只中なのに、弱気になって内に籠もろうとはしていません。前に、前にと挑戦する姿勢です。憤死したとはいえ、くじけない、高い志を感じさせる作品です。『歌わぬ人』（一幕）は、一転して現代の家庭劇です。登場人物は「恭助（思索家。二十九歳）、直子（その母、

百三の発病と療養の経過（年譜の記録から）

- ①大正 2(1913)年 12月、一高 3年目に結核発病
- ②同年 12月、須磨に転地療養
- ③3年 1月、福山・鞆に転地療養
- ④同年 9月、痔ろうで広島病院に入院
- ⑤4年 1月、九州・別府で療養
- ⑥5年 11月、広島・丹那で転地療養
- ⑦6年1月ころ、発熱で広島中村病院入院
- ⑧同年 3月、関節炎、骨髄カリエスを併発し広島田邊病院入院、常臥の身に
- ⑨7年 9月、肋骨カリエス併発で九大病院で診察
- ⑩8年 11月、明石市戎町で病臥療養で『俊寛』著述
- ⑪10年11月ころ、鎌倉額田病院に入院
- ⑫12年 6月、麻布額田病院に入院
- ⑬15年 10月、強迫観念症のため京都・済生病院に入院
※昭和 4年～ 14年は普通の人並みに生活
- ⑭昭和 15年 2月、中国大陸の長期旅行の疲労で自宅で病臥
- ⑮同年 6月、大森平井分院に入院
- ⑯同年 8月、東大物療内科に移る
- ⑰16年 1月、東大大槻内科に移り整形手術
- ⑱7月、再び平井分院へ
- ⑲17年 7月、大森の自宅で療養
- ⑳18年 2月、自宅で永眠

五十歳)、お村(上女中。二十七歳)」、他に恭助の従妹と文学士が登場します。人見知りする頑固な「恭助」が百三で、そんな「恭助」を温かく見守る「お村」はお絹さんに生き写しです。「恭助」と言い争う「従妹、文学士」は、「近代・合理派」といったところか。5人が交わす会話が、そのまま人生探究の箴言のように思えるのも魅力です。

恭助「本村(文学士の名前)のいう事の立派なのを御覧。しかもちゃんと整っているのを。けれど其(その言葉は皆死んでいるのだ。あの通りの言葉を愛ある人が云えば皆生きて輝くのだ)」
お村「人の冷たいのと、実(じつ)のあるとはすぐ解りますわ」
恭助「お前(お村のこと)はいつでも私の側に居ておくれ。私は知

識や趣味をお前に求めはしない。ただ善良な感じやすい、女の心が私の側にほしいのだ」
百三の率直な気持がそのまま反映されていて、百三の文学上の虚構と現実が一致しているのを実感する思いです。換言すると、現実の悩みを文学上の虚構に託してシミュレーションしているようにさえ思えるのです。気持のやさしい百三にとって、

お絹さんが胸の深いところに棲(す)み着いていることも、うかがえる気がします。

作品としては、恭助が「いい人たちの生涯を思うと自分の心まで清められる。そうなる」と皆善い人のような、祝福したいような気がするのだ」と独白して大団円となります。病魔との闘いが、このような明るい結末に結びつくところに、百三の楽天性を思わずにはおられません。

表題の「歌はぬ人」は、最後に恭助が「私はなんだか歌える時が来そうな気がしました」とあるから、「歌わぬ人」とは、恭助の長い悩みの期間を象徴しているのかなと思えました。

続く戯曲『父の心配』(四幕)も現代の家庭劇です。登場人物の「牧師五十歳、その妻四十五歳、その息子成吉二十四歳、養女道子十九歳」などの登場人物を眺めただけで、「成吉」は百三で、「養女道子」は精神的なお絹さんだろうと想像できます。

百三の実生活では、病氣から逃れられないまま、お絹さんとの戸籍上の入籍・離婚、さらに東京、横浜への転居と、生活上の大きな変化を迎えます。

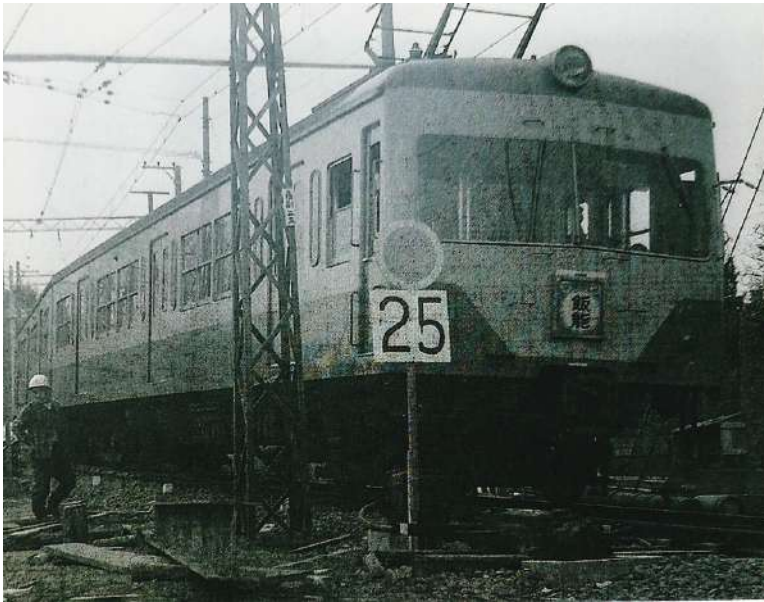
次回は「新しい村」です。

ハロー注意報③

——進駐軍がいた町のはなし

アメリカとの縁

松岡初枝



かず子が車掌をしていた頃の電車



左からビル、ビルの娘、かず子

かなりの人数の日米混血児たちが町にいたが、その多くがはず子たちのように恵まれない母子だった。米兵相手の母が産んだ子のほとんどが父の顔すら知らずに育った。町には

「英文の手紙代筆します」と書かれた代書屋があり、米国に帰って行った兵士宛てに英文の手紙を書いてもらう女達で大繁盛していた。会話は何とかなっても、いざ手紙となるとな

かなか書けない人が多かった。「あなたの居るアメリカへ行きたいから呼んで」「あなたの子を産んだから何とかして」、代書屋のインテリおじさんは「切ないねー。敗戦国の女なんてゴミ同然、大方が無しのつぶてだよ」と悲しい顔で言った。

しかし中にはちよつと救われるような話もある。私の叔母かず子は終戦直後十八歳、若い男が極端に少なかった当時、短期間ではあったが電車の車掌をしていた。かず子は元氣

な人で、母が言うにはとても声が大きかったらしい。「かず子ちゃんは笑顔もよかったよ」。

西武池袋線には稲荷山公園駅があり、ジョンソン基地のゲート前の駅だったために利用するアメリカ兵や基地関係の人も多かった。乗客のひとりに、後にかず子の夫となる新聞記者がいた。当時基地内新聞を発行したり、基地や町の様子を定期的に本国へ送信したりしていた。めずらしい女性車掌の記事を送るために写真を撮ったり、インタビューをしたりしているうちにかず子は直接会話したいと思い、近所の医者のお様で英会話のできる人に付いて勉強を始めた。奥様は外国生活をした人でマナーも教えてくれた。しばらくして親を説き伏せ、かず子と記者は結婚した。

それから数カ月、かず子が彼の子を授かって間もなく、激しさを増す朝鮮戦争に従軍記者として出征した彼は帰って来なかった。数カ月後に男の子が生まれた。彼は出征前はまだ見ぬ子の名前をつけていた。男だったらウイリアム（ビル）、女だったらジョセフィーヌ（ジョー）、かず子は未亡人となってしまった。一年足らずの結婚生活だった。

失意のかず子は基地内のP・X(売店)に子づれで働き始めた。そこで思わぬ救いの手が差し延べられたのだ。

基地のP・Xは多くの将兵が利用する。ある時ひとりのサージャントが声をかけて来た。「アイ・ノウ・ヒム」、彼はかず子の亡夫を知っていた。彼はその後かず子とビルに心を寄せ、再婚相手になってくれた。サイズモアさんは体の大きい優しい人だった。彼は私達にも良くしてくれた。子供達にはケーキやピザ、祖父と父にはG Iナイフ、祖母と母にはレースのハンカチなどをプレゼントしてくれる。ビルも彼に懐いて、後に生まれたバビーという男の子を連れ、四人でよく家にやって来た。サイズモアさんは飛行機の電気系の技師だったので、祖父や父と気が合っただず子の通訳でよく話し込んでいた。ビルとバビーは私の弟達と歳が近いので一緒に遊ぶ。「もっちゃん、くんちゃん、あーそぼ!」、男の子四人は本当に仲が良かった。英語と日本語が入りまじってケラケラ笑いながら走り廻っていた。

やがて、サイズモア一家は転任でカリフォルニアへと発って行った。弟たちは「ビルとバビーはいつ帰っ

て来るの:」。急に淋しくなると、時々送って来るかず子の手紙に同封された二人の写真を見つめていた。

その後、サイズモア一家は日本に帰って来ることは無かった。かず子叔母も二度と祖国の地を踏むこと無く、数年前に彼の地で生涯を終えた。優しい夫と二人の息子と共に、日系人として高齢になるまで働いていたという。

今から四十年程前にサイズモア家の長男ビルから手紙が届いた。沖縄の基地に転任したので会いたいとの内容だった。ビルも軍人となり同じ電気系の技師の仕事をしていた。ビルは夏休みに二週間ほど我が家に泊まり、私や弟達との再会を果たした。

「パパやママもバビーも元気ね!」ビルはすっかり大人になり、私の娘や弟の長男をハグした。娘は「ビルさんアメリカ人?」、「イエース」。夫もすっかりビルと仲良しになり釣りやドライブへ連れ出した。パーベキューを食べたり、本当に楽しいひとときだった。

今は互いに高齢になったが、文通は続いている。かず子叔母が迎った数奇な人生は私達姉弟、ビル、バビーとの従姉弟として、海を越えてのつながりを残してくれた。サイズモア家とわが家、大切な家族だと思う。

鈴木エドワードという有名な建築家がいた。建築家という括りだけでなく、ファッションモデルやコマー

シャルなどで見知っている人も少なくない。昭和二十二年、彼も基地の町入間川で生まれた。母は日本人、父はドイツ系アメリカ人、車のエージェントなどをしているスマートなインテリだった。母である鈴木のおばちゃんは陽気な江戸っ子、エディと姉のエマ、姉弟は幸福な子だったと思う。鈴木のおばちゃんと近所の医院の奥様が友達だったので、客として来店してもいた。

エマとエディは美人の姉、頭の良い弟として覚えている人も多い。父の仕事の都合で、エディが小学生の時に東京へ引っ越して行き、それからしばらくの時が流れた。

新進気鋭の建築家、鈴木エドワードが大きな賞に輝いたという記事を読み「あのエディちゃんだ!」。私もまわりの人もびっくりした。立派な姿のエディの笑顔が眩しかった。

エディは父の祖国アメリカのノートルダム大学を卒業し、ハーバード大学大学院で建築学を学んだ。大きな賞を得てからは破竹の勢いの出世ぶり、多くの雑誌などに登場するようになった。オンワード代官山ビル、渋谷警察署、山形赤湯駅、さいたま新都心駅、次々に斬新なデザインの建築を手がけていった。



鈴木エドワードの晩年の写真

「オオ!とばかりに片手を上げて、哲也が店に入ってきた。」

「コンニチワ!」

アリーさんが陽気な笑顔を見せた。彫りの深い顔に、カーリーヘアの金髪がよく似合っている。

唐突に電子音が響いた。ひと昔前に流行ったKANの「愛は勝つ」のメロディ。哲也がジャンパーの内ポケットから旧式の携帯電話を取り出した。折り畳みの電話を開いて耳に当てる。うんうんと頷いてから、携帯電話をアリーさんに手渡した。口をぱくぱくと動かしながら、手話で要件を伝える。アリーさんが小さく頷いた。

「ダイジョブ、アシタ、イエニオリマステス」

そう言って、携帯を哲也に返す。哲也が携帯を耳に当てて、指でオックスサインを作って見せた。ショートメールですむ用件なのだが、二人はこうしたやり取りを楽しんでいるようだ。

哲也は耳は聞こえるが、しゃべることができない。アリーさんは、しゃべることができるが、耳が聞こえない。大人になってから聴力を失ったので、発音の感覚はまだ覚えている。しかし、自分の声を聞いて補正でき

ないので、発音がかなりあやしくなっている。南米のコロンビアで生まれた育ったアリーさんは、日系ペルー人の母親から日本語を習ったのだという。

自動扉が開いて、母親と小さな女の子が入ってきた。異色のカップルを見て驚いた顔をする。坊主頭を金髪に染めたいかつい容貌の哲也は、実際に、長らく裏社会の住人だった。

椿姫

現代御伽草子 ⑨〇

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

「千五百円です」

注文した本の値段を告げると、哲也が一万円札を取り出した。受け取るうとする、サツと手を引く。やれやれ、またあれか。紙幣を折りたたみ始めた。小さくなった紙幣を今度は逆に開いていくと、一万円札が千円札に変わっている。アリーさんが大喜びで拍手する。

わたしに千円札を渡すと、今度は

度は違う方から拍手が聞こえた。女の子が一生懸命、手をたたいている。

赤いほっぺで目がキラキラ輝いている。女の子に向かって、哲也が左手を差し出して、大きく指を開いて見せた。

(おいおい、それはやめとけ)

哲也が手のひらを自分の顔に近づけると、小指をパクリと口に含んだ。モグモグやって指を抜くと、小指の先が消えている。これは、マジックと言えるようなトリックではない。小指に嵌めていた義指を口で啜えただけなのだ。

女の子の顔が強張って、泣き顔になった。

携帯電話が鳴り始めた。スマホの「てつや」の表示に、名乗って相手と話すのを待った。いつもであれば、アリーさんが電話に出て、注文する本の名前を告げるのだが、しばらく待っても無言のままだ。

「哲也、どうした?」

「アリーが、アリーが死んじまった……」

哲也の声だった。

「おまえ、声が……、いや、これから家に行く」

店の扉に鍵をかけて、「所用にて

「ヤクザだけはならんでくれよ。おまえと命のやりとりをしようはないけんのう」、中学の同窓会で、真顔で言われたことを覚えている。一年ほど前に、アリーさんを連れて実家に戻って来た。

「組を抜けるときに、指の代わりに舌を抜かれたんじゃない?」

しゃべれなくなった哲也を見て、口の悪い連中が噂した。

が摘ままれている。

アリーさんがまた拍手をする。今



外出中」の看板をぶら下げると、軽ワゴンに乗り込んだ。哲也の実家は、山裾の日当たりの良い場所に建っている古い農家だ。庭先にある畑一面に菜の花が咲いている。「会ってやってくれよ」

案内された広間のダブルベッドに、アリーさんはいた。鮮やかな金髪が、おそらくカツラなのだろうが、違和感を覚えるほどに顔がやつれていたが、それでもアリーさんはきれいだった。

「医者からは、半年もたないと云われてたんだが、よく頑張ってたよ」

れたよ」

ぼつりぼつりと話し始めた。しゃべらなくなったのは、病気に効果があるという神社に参拝したときに、願掛けをしたからだという。

「一番好きなものを断とうと思った。おれは、歌うのが好きだった。酒が飲めないのに、カラオケのある店をはしごしていたからな。歌わないんだったら、しゃべるのもやめちまおうと思った。どうせ、アリーには聞こえないんだし」

アリーさんは歌手として、日本に来たという。それが、原因不明の病気で聴力を失ってしまった。

「オペラが大好きだな。本当は音楽大学の音楽科に入りたかったそうだな。とくに『椿姫』がお気に入り、一緒にDVDをよく見せられたよ」

ジュゼッペ・ベルディの代表作。アレクサンドル・デュマ・フィスの原作小説の舞台を見たベルディが感激して作曲した。19世紀半ばのパリの社交界が舞台で、高級娼婦のヴィオレッタと、田舎出の純朴な青年、アルフレードの純愛物語だ。

(自分の姿を重ねていたのかもしれない)

風俗の仕事をしていた自分を哲也が救ってくれたと、アリーさんが

こっそり教えてくれた。

「アリーと約束していたことがあるんだ。天国に行ったら、二人で『乾杯の歌』を歌おうってね」

オペラ『椿姫』の第一幕で、アルフレードとヴィオレッタがデュエットする歌曲だ。

「ずっと練習していたんだ。イメージトレーニングだけだけどな。聞いてくれるか？」

子供のようにはかんだ笑みを浮かべた。わたしが頷くと、咳ばらいをして姿勢を正した。

「リビアーモ・リビアーモ・ネ・リエーティ・カーリチ、ケツラ・ベツレツツァインフィオーラ……」(友よ、いざ飲み明かそうよ。こころゆくまで……)

驚いた。イタリア語による堂々とした本格的なテノールだ。聞き入ってしまった。途中で、アリーさんの美しいソプラノが合唱する声が聞こえたような気がする。

歌唱を終えた哲也が、不安そうにわたしの顔を見る。

「まだまだだな。もっと練習しておかないと、アリーさんは一緒に歌ってくれないぞ」

アリーさんが頬笑んだ。

まちの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

高級車停めて路傍の土筆摘む

近藤 昌平

初蝶の潜み過ぎしは何処いずこかと

富久光

春立つや幕開くサッカースタジアム

片岡 正人

ヘルニアの術後良好春浅し

隆愚

夫逝く解らぬ妻や寒に入る

大槇 三代子

蓬つむ指の余香や母想う

寺内 龍二

怖々こわこわと土の中からふきのとう

赤川 冬人

吾がの身を不死身と思いきり来し

松岡 初枝

休めとふ声みずからが発す

投稿&寄稿

候のことば

「菜虫なむし」と「夢虫」 隆愚

旧暦の七十二候で三月十五日から十九日頃の啓蟄の末頃を「菜虫化蝶」(なむしちようとかす)の候といひます。青虫がさなぎで冬を越し羽化

して紋白蝶になる時期です。「菜虫」は菜を食べる虫ということで青虫、つまり紋白蝶の幼虫をさします。

幼虫から蛹になり、成虫になってはばたく蝶のことを、音の人は「夢虫」や「夢見鳥」と呼んでいましたが、紋白蝶やほかにも色とりどりの種類の蝶が舞い始める季節、どの蝶も夢を見ながら飛んでいるように見えま

す。

その呼び名は、古代中国の思想家、莊子の説話「胡蝶の夢」に由来するそうです。蝶になる夢を見たけれど、本当の私は蝶で、いま人間になっている夢を見ているだけではないか、という話です。夢と現(うつつ)が混ざり合う幻想的な蝶のイメージは、昔も今も変わりありません。菜の花の化したる蝶や法隆寺

福永耕二

「二月休業」

赤川 仁洋

どら書房の2月休業のことを書くのが、3月号の恒例になっている。骨休めしているというイメージがあるので、ちゃんと仕事をしてますよと、毎年ここで言い訳しているような気がする(苦笑)。

未整理本が山積みになっているので、今回は棚などを作る余裕はないと判断、ひたすら本の仕分けである。まず、ネット販売用の本と店頭用の本、処分用の本をざっくり分ける。分厚い本は送料が高むし梱包が面倒なので、ネットで値段が付いても店頭用にするのがけっこう多い。

それから本のお色直し。濡れ雑巾で汚れを拭いて、必要があれば三方

(天、地、小口)にサンドペーパーをかけてシミや汚れを落とす。カバーが傷んでいたら半透明のメンディングテープで補修、必要ならばボロ隠しにグラシン紙やトレーシングペーパーで覆って保護する。

ネットの登録作業がまた時間がかかる。どうにかベッド周りの古本だけは整理して、夜中にトイレに立つときに足をぶつけなくなつたが、まだまだ先は長い。本の引き取りを再開するには時間がかかる。そのかわりに、ネットの売上は好調、地道な努力は報われるのである。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

● **一 硬式テニス参加者募集** ●
MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内&屋外コート
・火曜日 (9:30 ~ 12:00)
・水曜日 (9:30 ~ 12:00)
・土曜日 (10:00 ~ 12:00)
● 連絡先：中川 (☎070-8991-1682) ●



● 《情報&原稿を募集します!!》 ●

- 仲間募集 ● 教室&講座案内
- イベント情報 ● あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

● **どらくろあ** ●
● **ホームページ** ●

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



● <http://shobara.wix.com/dorakuroa> ●

さけくらべって
なんじゃろ?

さけくらべ
IZANOMI SHOBARA CITY SAKÉ MARCHE

土曜日 3.9 / 土曜日 3.30 / 土曜日 4.6
朝9時頃より 朝10時より昼15時まで

お酒のお話
し・ま・せ・ん・か?

comeme 市場

場所：お問い合わせ
庄原酒販有限会社
庄原市中本町1-8-1
☎(0824)72-2183




「ぐんぐん伸びよう会」 (教室：庄原市川西町241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

自学自習力を育てる (1)

もし、高校生や大学生になっても、誰かに頼らなくては勉強できないよう
だったらどうでしょうか？ **自分が興味、関心のあるものを見つけた場合、
それを徹底的に自分のものにするために、根気よく自分自身の力で調査、
研究し、納得いくまで挑戦し続けることができたらどうでしょうか？**

無料体験学習受付中!! お気軽に問い合わせてくださいね。 対象者：0歳～小学6年生

黒板のない教室



発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183
協賛：九日市愛好会

編集後記

◇先日、福山に行ったのですが、ファミリィレストランに入って驚きました。端末を使ったセルフ注文や会計のセルフレジは経験していたのですが、料理を配膳用のロボットが運んで来たんです。……慣れるしかなかったですね(苦笑)。

◇音谷健郎さんの「倉田百三の流転」がスタート。懊悩する作家の姿が浮かび上がります。前シリーズの「百三の青春」を小冊子にまとめる予定です。興味のある方はどら書房まで連絡を。山崎允さんの新連載は、もう少しお待ちください。

◇三寒四温、寒さのぶり返しが体にはこたえます。ふきのとうも芽を出して、春はもうすぐです。

第270回

くんちいち

しょうばら九日市

出店予定一覧（順不同）

- ・文屋
- ・郷屋
- ・ぬくもり
- ・ちくちくはうす玉手箱
- ・お福
- ・工房アム
- ・農楽会
- ・二八そば加工所
- ・とらち
- ・さだっさ
- ・健康企画グループ
- ・里山キッチンほっぺ
- ・久代水産
- ・くんえん工房 香豚
- ・克国水産
- ・田崎屋
- ・宮川屋
- ・和み屋
- ・どんぐりーず
- ・クラフトショップ
- ・くららおばさん
- ・てしごと比和
- ・アーミッシュ
- ・満じいの手打ち蕎麦
- ・17KICHEN
- ・かぐや姫
- ・ふくふく牧場
- ・佐藤園芸
- ・鮎屋
- ・健康企画グループ
- ・TSUDA



くららおばさんの紙芝居

★高町・どろぼうと観音様★

場所：まちなか広場

開演：9:30～

3月9日(土)

9:00～13:00



TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
3月8日(金)～10日(日) 10時～15時
令和5年度庄原市文芸大会入賞作品展

★利き酒・試飲イベント「さけくらべ」(庄原酒販)
ガレージセール同時開催(場所:旧松本額縁店)

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円

★どら書房、休憩室(漫画ルーム)あります!

*出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円～
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】

<http://www.kunchi-ichi.jp>

